

配信日：2012年8月12日

## 史訪会WEBニュースレター

編集人：新地比呂志

E-mail: CQB02347@nifty.com (不明点はこちらへ)

● 会員の皆様へ。

ご無沙汰しております。お仕事に、研究に、ご多忙な日々をお過ごしのことと存じます。どうか8月の猛暑、お体に気をつけてお過ごしください。

● 史訪会学術討論会が終了しました。

7月29日(日)10時～18時、兵庫県民会館で実施いたしました。大変充実した学びになりました。事務局長の斎藤さんをはじめ、発表者の先生方、ご参会の先生方、この場を借りて、あつく御礼を申し上げます。

● 目次

1. 史訪会第19回総会議案について

総会にて議案は承認されました。

2. バッグイ(MACKAY)とFORMOSA

黄麗雲

3. 山陰初の飛行場であった米子飛行場について

井上敏孝

4. 陳公博の日本滞在

新地比呂志

史訪会第 19 回総会資料（日時：平成 24 年 7 月 29 日（日）、場所：兵庫県民会館 303 号室）

## 議事

### 1 平成 23 年度事業報告

- ・第 18 回学術討論会 12 月 25 日（日）、12 月 26 日（月）、神戸市勤労会館
- ・会誌『東洋史訪』第 18 号〈予稿集〉発行、平成 23 年 12 月 22 日
- ・会誌『東洋史訪』第 19 号発行、平成 24 年 3 月 31 日

### 2 平成 24 年度事業計画

- ・第 19 回学術討論会 7 月 29 日（日）兵庫県民会館
- ・会誌『東洋史訪』第 20 号 平成 25 年 3 月 31 日
  - ★原稿締切：12 月 15 日厳守。原稿募集中です。
  - ★印刷会社の変更を検討。→会計負担の抑制
  - ★査読および校正の強化。→質的向上
- ・単行本『台湾の経済と社会』出版
  - 晃洋書房に原稿を提出済み。8 月中に執筆者校正（2 回）
  - 発行予定：平成 24 年 8 月 31 日
- ・日本学術会議協力団体の承認を目指す。
  - ★会員数の確保 → 100 人以上。

### 3 会計報告及び予算（別紙）

### 4 平成24年度役員（案）

顧問	松田吉郎		
会長	新地比呂志		
副会長	蔭木原洋		
	白井征彰（『東洋史訪』担当）		
東日本地区担当	横井香織	関西地区担当	藤井賢二
九州地区担当	新福大健		
中国支部長	李広志	台湾支部長	蔡龍保
事務局長	齋藤尚文（討論会担当、名簿管理担当兼務）		
会計	井上敏孝	会計監査	趙従勝
ホームページ管理	浜野勇貴		
編集委員	堤和幸、上谷浩一、小野泰、横井香織、松田吉郎、井上敏孝 齋藤尚文、浜野勇貴、趙従勝		

### 5 次年度学術討論会予定

日時：平成 25（2013）年 8 月 4 日（日）

場所：神戸市勤労会館または兵庫県民会館

# バグアイ (MACKAY) と FORMOSA

黄麗雲

(世新大学助理教授)

## 1. 前言

2012年6月に台湾玉山社がバグアイ日記の漢訳本を出版刊行した。<sup>1</sup>それは2007年に淡水真理大学が受託され、<sup>2</sup>出版した英語版の12冊を3冊にまとめ直した漢訳本となった。『馬偕日記』という漢訳本が①1871～1883、②1884～1891、③1892～1901に分けて訳出しながら誕生したが、馬偕博士が台湾北部に30年間滞在した生活体験記憶史と見てもよいであろう。140年前に清末を経て日本統治時代の明治中期を通った異人が他者として、戦乱たる台湾の様々に印象づけられており、異文化交流に貢献したわけである。その台湾における生活記憶図像が内容的には医療、伝教、教育につく記録が核であるが、旅行と風俗見聞(族群関係、宗教信仰)、時事(社会文化議題)などの記入も少なくなかった。因みに台湾文化史を研究する参考文献として価値が高いし、地方学の読本教材としても使えられるし、今日のグローバル史的比較研究を行うときに、好い選択対象ともなれたりする。私人日記であるので随意的なところがかなりあり、不完全な記載もあったそうで、にも関わらず歴史・文化学界に情報資源の交換機能を果たすために、ここでこの短いメッセージを紹介しておく。

馬偕博士はかつて『From Far Formosa』という本を著作した。本の中に彼は、「淡水の住居に小さい図書館を設けて、蔵書が完備と言え、自分なりの博物館を建てたらしい」と述べたことがある。にも拘らず、『馬偕日記』という漢訳本が『From Far Formosa』の詳細でない箇所を補うことのできる本となった。結論として、上記のような効果が見られた。それでは、馬偕博士の抜群な観察力を借りて、台湾人の個性別と地質状況と動植物の生態をも一緒に理解して行こう。下記のように1871年、1872年の2年間の日記を重点に最小限まで選び、短く日本語訳してみる。今度、別文で外の紹介をして見たいと思う。

## 2. 出発と経由

1871・11・1(水曜)「美利堅号」に乗って、サンフランシスコから出発した。

1871・11・26(日曜) 富士山の山頂に白雪が覆っているのを「美利堅号」から見ていた。

1871・11・28(火曜) 横浜港登岸、外国人区と日本人区の間を散歩していた。水車、人力車、馬車、船夫と石造建築を見物した。

1871・12・4(月曜) 船が汕頭を通過して、捕魚用のジャンクが一杯で蝶蝶のように見え、

---

<sup>1</sup>北部台湾基督長老教会大会と同史跡委員会の計画によった。

<sup>2</sup>馬偕博士辞世百周年記念活動の最後の活動であった。1901年に彼は淡水に病死し、淡水に葬られた。

艦隊ほど壮観な風景でした。

1871・12・5（火曜）朝8時にイギリスの国旗が山頂に飛んでいる姿が見えていて、その後ようやく香港に着いた。登岸した途端に漢学家 Eitel に会った。<sup>3</sup>

### 3. 台湾へ向かった

1871・12・28（木曜）朝8時にアモエ港に入港、11時に「金陵号」に乗り換え、台湾へ向かった。黒くなってから出発した。

1871・12・29（金曜）午後四時に打狗港に着き、小さい舢舨で登岸した。徳記洋行の Hardie さんと Mansan 医者に会った。

1872・1・5（金曜）数時間の祈祷後、北台湾を今後の宣教場として決めた。

1872・3・9（土曜）淡水港に到達した。今まで誰も宣教区としなかった。淡水の美に感動した。

### 4. 平埔族に宣教

1872・3・15（金曜）大社村落（今豊原市内）にある平埔族の男女、子ども入れ計40名が出迎えに来た。漢人もその中と回りに住んでいる。夜約60名が崇拜に参加した。

1872・3・16（金曜）大社にて病人がお医者さんに絶えずに見に来た。私は周りを考察し居民を観察するために動いていた。彼らの両眼は黒くて丸い、親切のよう見え、体格も他国の原住民と変わらない。高貴或はだるい性格を持ちながら群れて居住するのが好きである。老若を問わず煙葉のタバコを吸っており、檳榔を食べている人もいる。

1872・3・21（木曜）今朝もう一つの平埔族の村落へ行った。赤足で沢山の溪流を渡った。一行は長い列を作って山を下した。内社（今苗栗鯉魚潭）へ向かった。

1872・3・22（金曜）内社で隣接、且目を引く二つの村落を見つけた。居民はすべて信徒である。そこに大量のトマトの成長ぶりを見た。本土の風景らしい。

1872・3・24（日曜）大社に夜大きい集会があった。漢人も大勢出席した。漢人は原住民よりも利口であるし、勤労である。

1872・3・25（月曜）午後二時前に漢人地域に滞在した。途中綺麗な田舎風景と良き農作物が見られた。稲、薩摩芋、大麦を見たり、甘蔗、壮麗な大樹（pride of India）が道路に沿って生長しているのも見たりした。予定通りの時間に高山側に着いた。地理学的に考えれば、われわれは大峡谷（造山運動によった）に位置していた。われわれの頭の上には岸壁が垂直に聳えていて、「石灰岩」の砂岩で研究に値すべきである。

1872・4・6（土曜）夜明けに早足で川辺にある町「新莊」にやって来た。そこで快船に乗って艋舺、大稻埕を通り過ぎて、イギリス人は艋舺と同川岸のあたりで商売を行う事が分かった。淡水河の下流の平野を乗り越えたら、右手に美しい村落を見た。干豆（今関渡）と呼ばれる村である。午後四時にまた淡水と言う町に戻った。

---

<sup>3</sup> Eitel, Ernst Johann 1838～1908 傳教士、1862年入華、1865年ロンドン・LMS加入。

## 山陰初の飛行場であった米子飛行場について

兵庫教育大学大学院 博士研究生 井上敏孝

現在、鳥取県には県西部にある鳥取空港と東部にある米子空港の 2 つの空港がある。一地方空港に過ぎない前者に対して、後者は米子鬼太郎空港との愛称が用いられ、航空自衛隊美保基地の滑走路を利用する共用空港である。そして同空港は山陰地方にある空港中、航空管制を行い、海外との定期航空路を持つ唯一の空港でもある。

しかしながら戦前期の鳥取にはこれら 2 つの空港とは別の空港(飛行場)があったが、この点はあまり知られていないのではなかろうか。今回は鳥取県にかつて存在していた飛行場について取り上げてみたい。

この飛行場は戦前期の鳥取県米子市に建設され、場所でいうと現在の米子ゴルフ場や陸上自衛隊米子駐屯地にあったとされている。滑走路や管制塔等の施設は残されていないが、米子駐屯地内にある史料館では、同飛行場に関する記念碑等を見ることが出来る。そもそも米子飛行場が建設された背景には、朝鮮及び中国東北部に向けた国際定期航空路開設の計画があった。同計画は 1934 年に立てられたものであったが、この定期航空路の補給等に供する中継地として選ばれた場所が米子であった。日本海側における中継地選定の際には松江や新潟も名乗りを上げていたものの、朝鮮半島や大陸との距離が他に比べて近いことや米子市の働きかけが功を奏し最終的には米子に飛行場が設置されることになった。こうして米子飛行場、別名三柳飛行場は 1938 年完成したが、同飛行場には逓信省の航空機乗員を養成する施設も合わせて設置されることとなった。翌 1939 年には大阪—米子間で定期航空路が、その翌年の 1940 年には東京—米子—京城—新京を結ぶ国際定期航空路がそれぞれ開設されている。同国際航空路中、米子への寄航は燃料補給のためという限定的なものであったが、これにより米子は戦前期の山陰地方で初めて、なおかつ唯一国際定期航空路で結ばれた場所となった。

ただし同飛行場は 1941 年に陸軍飛行場となり、戦局の激化に伴って定期航空路はすべて廃止を余儀なくされる。また敗戦後は連合軍によって占領され、後に飛行場としての役割を終え 1939 年に国へ、1970 年には国から米子市へと土地が返還されている。したがって同飛行場における定期航空の運航はわずかの期間であったが、同飛行場が山陰地方で初めてかつ唯一国際航空路で結ばれたことは特筆できることといえる。

米子は現在も山陰地方で唯一国際定期航空路で結ばれているが、こうしてみると「海外からの玄関口」となっている米子の役割は、戦前期に始まったものといえよう。最後に余談であるが同空港は敗戦後の 1945 年 8 月 25 日に、ある人物が利用したとされている。この人物は戦前の日本にとって関係の深い人物であった。また史訪会にとっても縁のある人物である。これらの点については、別の機会に発表できれば幸いである。

## 陳公博の日本滞在

明石市立大久保南小学校 新地比呂志

もうすぐ終戦記念日がやってきます。終戦記念日と関連して、井上敏孝氏が原稿で論じられている「米子空港」に降り立った人物にふれてみたいと思います。

1945年8月25日、米子空港に到着したのは、南京発の中華航空MC機であった。飛行機に乗っていたのは、誰だろう、中華民国南京政権代理主席陳公博の一行であった。主席の汪精衛はすでに死去し、陳公博が後をついで代理主席となっていた。1945年8月11日午後2時、日本外務省（東郷外務大臣）から南京に一通の電報が届いた。電報の内容は「①日本のポツダム宣言受諾の内報②日本への協力感謝③相手国政府首脳希望聴取」であった。在中国の谷大使が陳公博代理主席に日本敗戦の謝罪と亡命の希望の可否を伺候しにきた。要人の亡命工作は、対日協力を選択したことに対する日本側のささやかな「お詫び」であった。しかし陳公博の返答は、「否」であった。

陳公博にとって、この時期は、いかに円滑に、解散した南京政府を蒋介石の重慶政府に接收させるかが課題であった。しかし南京で深刻な事態が起きた。もともと当時の南京政府に2大派閥があったことは、周知の通りである。初代主席であった汪精衛の流れを汲む陳璧君（汪精衛夫人）を頂点とした公館派と財務部長で上海特別市長兼中央儲備銀行総裁の周仏海の流れを汲むCC派である。陳公博は両派のバランスをとりながら政権運営をしていたが、両派は激しい対立は、日本敗戦以後、拍車がかかった。その頂点となったのが、周鎬事件であった。陳公博は公館派とCC派のバランスに乗っていたとはいえ、公館派と目されていたようである。CC派は蒋介石と密かに通じており、日本敗戦後蒋介石の南京入城を期して、「暗殺」、「新聞社の乗っ取り」「不法逮捕」など乱暴狼藉をしていたようである。このCC派のアジトが周仏海が総裁を務める中央儲備銀行となっていたことから、陳公博を校長とする南京軍官学校の生徒は激高し、歩兵銃、重軽機、野砲まで用意して、一触発という事態になっていた。実は無条件降伏の現地の日本憲兵隊がこの調停をし、周鎬事件を納めたという。

陳公博は、この事件が勃発するまでは、南京に残る予定であったが、陳公博がいる限り、公館派とCC派の対立が激化すると考え、亡命を決断した。陳公博が去ることによって、蒋介石と通じていた周仏海により、円滑に南京政権が蒋介石に接收されると考えたのである。

陳公博一行は1945年8月25日、南京を発ち、米子空港に向かった。小川哲男旧南京政府軍事顧問の手引きによるものであった。しかしここからが苦難の逃避行であった。敗戦国日本が戦勝国中華民国の「漢奸」を匿うことは、無理があった。一行は米子を転々とした後、京都の金閣寺に潜伏していた。一行は、変装した上、人前では中国語は厳禁であった。しかし陳公博一行の所在が、発覚することは、時間の問題であった。

9月8日であった。重慶側の何応欽より陳公博の引き渡し要求が来た。引き渡し要求の内容は「①中華民国政府より日本政府にあてた公式要求であること②要求の主点は陳公博一行を逮捕し南京に護送せしめること。③一行は叛国罪犯として扱われること」であった。

無条件降伏した日本政府としては、中国側の要求に従うことは当然の義務であった。しかし随行した実務担当者にとっては、日本がお膳立てして樹立した親日政権の主席代理を、無情にも引き渡すこと、これは断腸の思いであったろう。外務省の大野部長が、陳公博に世間話のあと、「実は」と切り出したとき、すぐに陳公博は「中国に帰ります」と告げたそうである。さらに一行の逃避行の世話をしていた小川哲男の提案「亡命でなく、地下潜行」に対しても陳公博は即座に拒否したという。陳公博は逮捕されて堂々と所論を陳述しようと考えたのであろう。

1945年10月2日、米子飛行場に到着した。飛行場には、青天白日機のマークをつけたC-47が待っていた。ここで中国憲兵に陳公博一行は逮捕され、米子から南京へと向かった。南京に護送された陳公博はすぐに収監された。1946年4月5日江蘇高等法院で公判が始まった。公判名は「南京偽国民政府主席に係る漢奸裁判」であった。検察官の起訴の要点は、①日本との条約締結②日本への物資供給③儲備卷の発行④対英米宣戦布告⑤壮丁の徴収⑥阿片の販売⑦奴隷化教育⑧清郷工作⑨綱紀紊乱⑩偽軍編成であった。陳公博はこれに対して、南京政権と自分が取った行動の正当性を理路整然と答え、多数の傍聴人をして感動せしめたという。また多くの新聞社も陳公博擁護論の記事を掲載していたという。

しかし判決は1週間後の4月12日、「被告人を死刑に処す」と下った。そして1946年6月3日午前8時銃殺刑が執行された。

陳公博が漢奸であったかどうかについては、別の論で検討していきたい。ただ日本によって樹立された「南京政権」の主席代理の陳公博が、日本の申し出により一時期日本に滞在し、日本によって中国に引き渡され、処刑されたという重い事実は、胸に刻んでおきたい。

本稿は、『日中終戦秘話』（小川哲雄著、原書房、1985年5月）をもとにした私の所感です。